

7月27日(日)パレスチナの隣国、ヨルダンのマルカ空港に到着したガザの被害者のための緊急物資  
写真提供: UNRWA 清田明宏医師



### ガザ—深刻化する青少年の PTSD

『ニューヨーク・マガジン(電子版)』7月22日

「私たちの科学(Science of Us)」掲載

難民救済事業機関(UNRWA)保健局長

清田明宏医師情報提供

今、イスラエル-ハマースの紛争地、パレスチナ・ガザ地区で、爆撃、難民、おびただしい数の民間人死傷者といった、報道のレンズが捉えがちな側面が、世界の耳目を集めるのは当然といえる。しかしその紛争の水面下では、爆発寸前の、より長期的な問題がある。ガザの人々は、世界でもおそらく最も若く、そして様々な意味で、最も傷つけられた人々である事だ。過去数年にわたり繰り返され、ガザの青少年が耐えてきた暴力の心理的ダメージは、今後何十年も継続しかねない。この問題は、ガザの住民はもちろん、イスラエル人、エジプト人、また、この地域の平和を願うすべての人々にとって、大きな挑戦である。

「これはガザの住民、特に青少年にとって重大な問題だ」と指摘するメールを、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)保健局長の清田明宏(セイタ・アキヒロ)医師から受けとった。

今回の被害の甚大さは戦闘終了を待たないと分からないものの、過去の調査からは、その深刻さが窺える。第2次インテファダ中に実施された2004年の調査では、10歳から19歳までのガザ地区の子どものうち、32.7%が重度の、また、49.2%が中度の PTSD(心的外傷後ストレス障害)症状を示している。調査対象として抽出された子どものうち、なんと83.2%が銃撃を、66.9%が負傷者や死亡者を目撃しているが、これは過去に繰り返された暴力の結果である。より最近では、2012年11月に1週間続いたハマース—イスラエル紛争の直後、ユニセフが実施した「心理・社会的迅速評価」が、同様に深

刻な内容を伝えている。調査対象の子どもは、戦闘に晒されたガザ地区の広い範囲から抽出されたが、84%が「動転した、あるいは茫然とした表情」を示し、77%がふだんよりよく泣いたと報告されている。

同じ時期に UNRWA の診療所を巡回した清田医師は次のように語る。「予防接種や、子どもの成長を測るための定期検診など、日常的なケアを受けに来た数十人の子どもと母親のすべてに、特に子どもの状況について尋ねた。母親たちは異口同音に、子どもの様子が変わったこと、よく眠れていないこと、食欲が減退していること、夜泣きや夜尿をすること、母親にしがみつこと、などを訴えていた。」

イスラエル—パレスチナの紛争は、バスへの自爆攻撃から、深夜に強行される自宅への襲撃、空爆に至るまで、巻き添えにされたイスラエルとパレスチナの民間人すべてに被害を及ぼしてきた。しかしイスラエル人や、西岸地区のパレスチナ人と比べ、ガザ地区住民が PTSD(心的外傷後ストレス障害)に罹る確率は確かに高いように見える。第 2 次インティファダの被害にかんする 2009 年のイスラエル・パレスチナ共同調査によれば、PTSD の臨床基準に該当したのは、イスラエル人は 6.8%、西岸地区のパレスチナ住民は 37.2%であった。

異なる時期に、異なる方法で実施された調査結果を直接、比較検証することは難しいが、他の要因が同じだと仮定した場合、ガザ地区住民が、特に過去 5 年ほどの間、紛争による最大の心理的打撃を受けたと考えることは、一般的推論の範囲内である。イスラエルとハマースの敵対関係がほぼ恒常的に続く中、2008 年あたりから、ガザ地区住民は、誰よりも増して、直接的な暴力への対処を強いられてきた。この期間、西岸地区は、この地域にしては、比較的な静穏を保ってきた。

ガザ地区で戦争が起きると、隠れる場所がないことが多い。ガザ地区は他の場所よりも、死と破壊の集中度が高い。ケイティー・ザヴァドウスキ(Katie Zavadski)は、7 月 20 日付『ニューヨーク・マガジン』の「毎日の情報提供(Daily Intelligence)」セクションで、なぜ、ガザ地区で紛争による子どもの死亡率が高いのかを説明している。ガザ地区はたった 360 平方キロの総面積に 180 万人が暮らす人口密集地帯だ。一方、西岸地区では、5,860 平方キロに 270 万人が暮らしている。

ガザ地区でも精神医療は提供されている。しかし提供は限界に達していて、医療はしばしば中断される。精神医療のインフラは、保健省、NGO 諸団体、UNRWA の混成で賄われ、清田医師の説明によると UNRWA の学校、診療所、女性センターには“心理社会的カウンセラー”がおり、必要なケアやカウンセリングを提供し、また本格的な治療を受けるために、患者を保健省へ紹介している。治療はさまざまな障害がある。イスラエルによる(そして南側ではエジプトによる)封鎖が、境界を越えた医薬品の搬入、また、一時的な人の出域を困難にしている。専門的治療が必要なガザ地区の患者は、より設備の整ったイスラエルかエジプトの総合病院に行かなければならないが、通行許可が下りないことが多い。

これらの障害が重なると、治療可能なケースですら潜在的な危機へと転じる。「たいていの子どもは

強い回復力を備えていて、トラウマをもたらすような事件からも立ち直ることができる」と、ウィスコンシン大学マディソン校で青少年の PTSD を専門とする研究所を主宰する、ライアン・ヘリング (Ryan Herringa) は言う。「一回限りのトラウマであれば、あるいは十分な社会的サポートがあれば、たいていの子どもは回復可能である。」

しかし、トラウマが積み重なり、継続的な治療へのアクセスが奪われると、PTSD に苦しむ子どもたちが心理的に全快する可能性を減じてしまう。「こうしたトラウマの発生する戦争地域で、トラウマが何度も繰り返して起こり、次に何が起こるか分からないという心配が強い場合、問題はずっと複雑になると思う」とヘリングは語る。

青少年の割合が非常に高いガザ地区の人口構造(今年 5 月の時点で、住民の 63.8%が 24 歳以下であり、失業率は 40%を超えている)を考えると、こうしたトラウマの反復は、時間が経つにつれ、大きな悲劇を招きかねない。

とても若くて、フラストレーションのかたまりとなった一団に、何度もトラウマを与え続けると何が起きるのか。ガザ地区の問題は、イスラエルを標的とするロケット弾以外にも、境界を越えて暴発する恐れがある。イスラエルとエジプトの両国が、出来れば無視したいと願う孤立無援の「非国家」ガザ地区に、このままでは将来の展望はあり得ない。イスラエルとエジプトがガザを隣人として扱うことが不可欠である。しかし PTSD の被害状況がこのまま続くと、それが今まで以上に困難になることも考えられる。

PTSD の治療を受けることのできない子どもたちは、将来、さまざまな疾患に苦しめられる、と清田医師は言う—「注意欠如症候群(たとえば不安状態、多動、注意欠如、恐怖症、衝動性など)や、暴力、極端な意見に走ること、学校の成績不振、依存症、犯罪行為やその他の反社会的な行為や考え、に結びつくリスクが高い」のだ。これらの問題のすべてが、世界から隔絶され、過去には青少年をリクルートして、混雑するマーケットで自爆させたことで知られる過激派に率いられる社会の内部で、増幅されているのは言うまでもない。

だから、今回の紛争の最後の爆弾が落ち、ハマースの最後のロケット弾が発射された後も、ガザ地区の民間人たちは、暴力の波が次に押し寄せるのは何時かと怯えながら、自らは何もできないままに、囚われの身であり続ける。このことが、清田医師によれば、「国家全体の経済的、社会的、文化的発展を危くする」のである。

(翻訳協力: 獨協大学/高橋雄一郎ゼミ)